



Aoyama Gakuin University Library Information
AGULI

63

Nov. 1, 2003

青山学院大学図書館報



(秋篠寺本堂)

目次

アキコ 佐藤 靖 ... 2

特集 図書館再発見

- ・論文・レポートの作成と図書館の利用について 吉岡 祐次 ... 4
- ・本の香り 山本 寛 ... 6
- ・私の図書館の活用法 戒野 敏浩 ... 7
- ・We live here! 中川 浩宣 ... 8

所蔵資料紹介

視覚の時代の幕開け 荒木 善太 ... 10

ご存知ですか? (その6)

自動書庫の出庫まで 12

山手線コンソーシアム図書館紹介

明治大学図書館 眞鍋 絵李葉 ... 14

データベース、電子ジャーナルのご紹介 15

図書館広報板 16

アキコ



経営学部長 佐藤 靖

SATOH Osamu

ボクが子供の頃、アキコという名前の初老の女性が時々家に泊まりに来ていた。ボクの祖母のことを「姉さん(あねさん)」と呼ぶので、てっきり祖母の妹だと思っていた。ボクはアキコオバチャンと呼んでいた。

オバチャンはヘビースモーカーだった。家にいる間中、煙草をスッパスッパやっていた。そして毎晩、冷やのコップ酒を飲んだ。オバチャンはとても美味しくそれにそれを飲んだ。

その当時、女性がお酒や煙草を嗜むことは珍しかったので、ボクは子供心に「このオバチャン何者なんだろう。」と思っていた。

ボクはオバチャンのアキコという名前

がどんな漢字なのか知らない。もしかすると、ひらがなかもしれないしカタカナかもしれない。

実はオバチャン自身もそれを知らない。それもそのはずで、オバチャンは文字の読み書きが全然できないというのだ。ボクはその時、自分の名前さえ書けない人がいることを初めて知った。

これはボクがかなり大きくなってから聞いた話だが、オバチャンの両親と兄弟は南米のどこかの国に移住したという。両親は、その渡航費用を得るために、オバチャンを遊郭に売ったということだった。

こんな人身売買が実際にあったことを知り、そしてそれがボクの身近な人に起きていたことを知り、ボクはなんとも表現しがたい感情を覚えた。

小学校さえまともに行かせてもらえなかったオバチャンがどのようにして成長したか、ボクには知る由もない。ただ、オバチャンが成人して

しばらくした頃、ボクの祖父と何人かの人々がお金を出し合って、オバチャンを遊郭から引き取ったということだ。

詳しいことは知らないが、ボクの祖母の実家とオバチャンの家とが遠い親戚関係にあった

ようだ。ボクの祖父は昔気質の板前で、自分は麦飯を食べてでも他人に白米を食べさせるような、そんな人だった。

その後オバチャンは、小料理屋などで働いていたようだ。自分の名前さえ書けないオバチャンが相当な苦勞をしたことは、想像に難くない。

でも、ボクが知っているオバチャンはとても羽振りが良かった。いつも一万円札を何十枚も財布にも入れずに裸のまんまポケットに忍ばせていた。それを時々出しては、ボク達の前でいかにも自慢げに数えていた。



その頃オバチャンは、どこかの社長さんの家で住み込みの家政婦をしていたそうだと。その家の人々がとても親切で、身寄りのないオバチャンを家族同然に大切にしてくれていたという。オバチャンは煙草代ぐらいしかお金を使わず、給料をそのままポケットに貯金していたわけだ。

それを見ていたボクの祖母は、「頑張って生きてて良かったね。」と話しかけていた。オバチャンはそれを聞いて、「ウン、ウン。」と神妙に頷いていた。

さらに祖母は、「そのお金、銀行に貯金しなさい。そしたら利子だってつくんだから。」と言った。でも今度は、オバチャンはウンと言わなかった。

「名前が書けないから銀行に行くのが嫌だ。」という。「銀行に事情を話して、なんとかしてもらおうから。」と祖母が言っても頑としてきかない。どうもオバチャンは銀行自体を信用していなかったようだ。

ある日オバチャンは、ボクにお使いを頼んだ。シュークリームが食べたいので、それを買ってきてほしいということだった。シュークリームのお裾分け欲しさに、ボクは喜んでお使いを引き受けた。

買ってきたシュークリームをボクから受け取ったオバチャンは、それを一人でパクパク食べた。シュークリームは10個あったが、他人にあげる気はさらさらしないようだ。子供のボクにさえ与えようとしなかった。

ボクはがっかりして、オバチャンが一人で食べるのを物欲しげにじっと見ていた。そうしたらオバチャンは、シュークリームを割って半分だけボクにくれた。

数年後、オバチャンはボクの家にはパッタリと顔を見せなくなった。年をとって働けなくなったオバチャンは、老人ホームに入ったということだった。

老人ホームに入ってから一度だけボクの家を

訪ねて来たが、その時もオバチャンはこざっぱりとした洒落た格好をしていた。でも、煙草は吸わなくなっていた。

それからしばらく、ボクはオバチャンのことを忘れていた。

10年ほど前、オバチャンが死んだということを伝え聞いた。身寄りの無いオバチャンの遺体は、地元の医大に献体されたということだった。

オバチャンは自分の名前さえ書けなかったが、ボクなどとても真似のできない大きな仕事をした。もう誰もオバチャンを馬鹿にすることなどできない。

こんな話も聞いた。医大にオバチャンを連れて行った後、主の去った老人ホームの部屋を片付けていたときの話だ。

オバチャンは持ち物らしい持ち物をほとんど持っていなかったそうだと。ただ、ベッドを整理していた時、枕の下から何やら封筒が出てきた。中には丁寧に畳んだ1万円札が40枚程入っていたという。

数奇な一生を過ごしたオバチャンにとって、信じられるのはお金だけだったのかもしれない。

シュークリームを半分しか食べさせてくれなかったオバチャンだけど、ボクは涙が出て仕方がなかった。

(経営学部教授

キャッシュ・フロー会計、財務分析)



特集

図書館再発見

論文・レポートの作成と図書館の利用について

吉岡 祐次

YOSHIOKA Yuji

暑い夏もおわり（今年は数年来の冷夏ではありませんが）、ようやく涼しい季節がやってまいりました。後期になると、ゼミの学生にとって、これからは卒業論文を準備する時期になるでしょう。また、ゼミに所属しない学部生にも、各授業の一年間の締めくくりとして、レポートなどが課される時期になるでしょう。そこでここでは、ゼミ生や学部生が論文やレポートなどを作成する手順について簡単に紹介し、それらと関連させた上で、図書館を有効に活用するということについてお話したいと思います。

・論文やレポートのテーマを選択する

論文やレポートを作成する最初の段階として、それらのテーマを選択するという作業があります。

論文やレポートを作成する際の要であり、かつ一番難しい段階であると思われます。基本的には、学校での授業やテレビ・新聞などのニュースを通じて、自分が面白い、または挑戦してみたいと思うテーマを選ぶことがよいと思われます。ただし、選択したテーマが専門的に分析するには不向きであったり、ある一定の時間内で完成させることが難しかったりすることもあります。したがって、自分で選択したテーマをゼミや授業の先生に相談して、論文やレポートのテーマとして相応しいかどうかの指導を受けてみるとよいでしょう。

図書館を利用するという観点からすると、図書館の「雑誌架」が役に立つかと思います。みなさんは洋服や食べ物、さらに映画などの最新情報を入手するときに様々な情報誌を参考にするでしょ

う。同じように、専門的な研究分野においても相応の雑誌が存在しています。たとえば、経済の分野においては『**経済セミナー**』という雑誌があり、学部学生でも十分に読みこなせるもので、かつ最新の研究や時事的な研究などが特集や連載の形で掲載されています。その他にも同じような雑誌が用意されていますので、テーマを選択する一つの指標として活用してみてください。

・テーマに関連する文献や資料を探す

論文やレポートのテーマが決まったら、次の段階として、そのテーマに関連する文献（本や論文）や資料を入手する必要があります。この段階こそが図書館の本領が発揮される場でもあります。

図書館で参考となる文献や資料を探す場合、基本的には、自分の選択した研究テーマに関して著名な研究者または専門家の文献を見つけることが近道でしょう。ここで、その研究者または専門家が誰であるかについては、ゼミや授業の先生にテーマの相談をする際に必ず聞いておきましょう。

そして次に、基本となる文献が見つかったならば、派生的に関連する文献や資料を探して収集しておきましょう。具体的には、基本となる本または論文の中の参考文献を参照して、気になった文献を検索して収集します。また、基本となる文献が本の場合、通常図書館では関連する分野の本は同じ場所に配架してありますので、基本文献を閲覧する際にその近辺の本も同時にチェックしておきましょう。もしかしたら思わぬ掘り出し物があるかもしれません。さらに、参考となる文献や資

料はできるだけ多く収集しておきましょう。なぜなら、文献や資料をたくさん集めたとしても、その中で実際に役に立つものが3分の1程度であるということとはよくあることですし、また逆をいえば、それだけたくさんの文献や資料に当たらないと結果として自分に必要なものには出会えないということです。

・文献や資料に基づき調査・研究する

論文やレポートのテーマが決まり、参考となる文献や資料がある程度入手できたら、次なる段階としてはそれらを調査し研究する段階に入ります。そして、その研究の総括として、論文やレポートそのものが完成することになります。なお、この段階でも図書館を有効に利用することが可能です。具体的には、調査・研究の作業を図書館の「閲覧室」で行うということです。図書館は、利用者がマナーを守ってさえいれば、静かなので快適な時間や空間を提供してくれます。また、文献や雑誌および辞書などがかなり揃っていますので、「調べる」ということに対してストレスなく作業をす



本館閲覧室

ることができるでしょう。さらに、調査・分析を進める上で新たに文献や資料が必要になったときにも、すぐに見つけることができるので便利でしょう。

さて、ここまでの話の中で、論文やレポートの作成手順を段階的に説明してきましたが、実は、それぞれは密接に関連しているので、必ずしも各ステップを完全に独立な作業として行うことはできないでしょう。たとえば、研究をすすめながら、新たに参考文献が見つかったり必要になったりすることもありますし、研究しながらテーマやメッセージが部分的に修正されることはよくあることです。また、論文の作成はとかく時間のかかる作

業となるので、その内容を中間報告として発表することは報告に対するコメントなどがもらえるので有益となるでしょう。ゼミ生であるならばゼミの時間に発表できるでしょうし、ゼミに所属していない学生でも同じような論文やレポートを抱えている仲間同士で発表し合う機会を作ることが大事だと思います。

・インターネットの利用についての注意

最後に、インターネットの利用に関する注意と図書館での情報収集についてお話をしておきましょう。今のこのご時世に、先の話の中で、インターネットによる文献・資料の検索についてはあえて触れませんでした。これにはちょっとした理由があります。たとえば、論文やレポートの文献や資料を探す場合、または調査・研究で新たに参考文献が必要になった場合に、いくつかのキーワードをインターネットで検索したとしましょう。このとき、よほど稀なテーマでない限り膨大な検索結果がヒットするはずです。このような場合、どれを選んでどれを切り捨てる

かの作業はある程度の知識がないとなかなか難しいものがあります。また、ネット上の情報はときとしてすべての情報を閲覧することができず、わずらわしく感じる時があります。そうであるよりは、先にものべたように、基本となる文献を目当てに図書館に赴き、それと合わせて周辺にある関連する文献を収集した方が効率的というものです。たしかに、インターネットによる検索は便利なのですが、はじめのうちは実際に図書館へ行って、足を使って情報収集するということを強くお勧めします。

(経済学部専任講師 財政学、租税論)

本の香り

山本 寛

YAMAMOTO Hiroshi

近年、学生の皆さんはIT化の影響で本をコンピュータから検索することが多いと思う。私もゼミや大学院の演習でそれを推奨してきた。この傾向は小学校から高校までにおいても同様であるという。つまり、現代はコンピュータから図書館そして本の世界に入る人が増えてきている。

しかし、「図書館再発見」というテーマで原稿を依頼され、これまでの図書館との関わりを回想してみると、私にとって図書館または本の世界への入り口におけるコンピュータの役割はほんの一部、それも最近になってからである。それよりも、私が図書館に魅入られてきたのは図書館がもつ「本の香り」である。

私のいう本の香りにはいくつかの意味がある。第1は、文字通り本から発生し、人間の嗅覚を刺激する書物自体から発する物理的な「香り」である。この「香り」はおそらく新刊書中心の書店より古本屋のものに近い。そしてこの香りに包まれると、本を書棚からとらなくとも、書名を見なくとも何となく背筋がピンと張り、勉強をしなくてはとか、知識を身につけたいなどといった気持ちにさせられてきた。どんな本でも、それを執筆した著者はその完成に大変な知的努力を傾けている。その知的営為が後世それに触れるすべての者に何らかの形で伝わるのではないかと考えたくなる。皆さんはどうであろうか。

第2の「本の香り」は本を収納している図書館内にある。たとえば、静かな空間（そうでない場合もあるが）、本を読むのに適した柔らかな採光、ゆったりとしたソファ、古びた図書カードケース（現在はほとんどみられない）など、知の殿堂たる図書館を構成する個々の舞台装置から醸し出されるものである。もちろん図書館司書という人

的資源がその主役であることはいうまでもない。

第3の「本の香り」は本を収納している図書館自体から発する荘厳さを漂わせた「香り」である。それは他の建物や施設とは異なり、外界からの隔絶感を漂わせている。そして、多くの図書館でその主な舞台装置は緑である。本学の図書館も同様であるが、多くの図書館が緑に囲まれている。ご存知の人も多いと思うが、都立中央図書館(広尾)は有栖川宮公園内の鬱蒼とした森の中にあり、同日比谷図書館も日比谷公園内の緑の中にある。森林浴によるフィトンチット効果(リラクゼーション効果)など、緑の人に及ぼす効用は様々な分野でいわれている。それらに加え、都市の雑踏から図書館を隔離する効果や知的思索を促進する効果があると私には思われてならない。

そしてこれら、本の香りを構成する要素には段階性がある。本好きは第3の図書館の建物に近づき、第2の建物内に入るにつれ、そして第1の本のそばに寄りそうにつれ本の香りの虜になる。このプロセスが図書館フリークの基本であるとするれば、コンピュータの検索によって本に接するというのは2次的でいささか無機的なものかもしれない。

これまでの私と図書館との関係を実感的にとらえてみました。学生の皆さんも一度自分の過去からの図書館との関係を振り返ってみてはどうですか。コンピュータだけが本の世界への入り口ではありません。何も考えずまず図書館の中で本と対話してみてください。

(経営学部教授 人的資源管理論)

私の図書館の活用法

戒野 敏浩

KAINO Toshihiro

1986年に伊藤忠商事(株)に入社後すぐに、人工知能の分野で新規事業を立ち上げるよう業務命令を受けた。入ったばかりで新規事業を立ち上げると命じられ、徒手空拳、途方に暮れたという状況である。まずは先人の行いを参考にしようと考え、図書館に行ったところ、伊藤忠を戦略的な総合商社に変革した瀬島龍三氏の伝記をたまたま見いだした。瀬島氏が伊藤忠に途中入社後、最初におこなったことが、シベリア抑留中の11年間の新聞を資料室で毎日読むことであった。これにより、時代、社会、ビジネス、総合商社を取り巻く環境についての大局を掴もうとされたのであろう。私もこれを見習い、ビジネスのキーワードを決め、図書館で過去10年の新聞を時系列に読むことを3ヶ月間続けた。大局観が頭の中に形成された後は、気になる部分について専門書や専門誌を読み、更にその分野の専門家に会い、より深い知識を得るようにした。それから、進出しようとする市場のお客様のところに何うと、お客様の話す業界用語や背景も含めて理解でき、何を欲しているのかがよくわかるわけである。その後も、事業企画、コンサルタント、情報戦略立案など様々な業務に携わったが、一貫して上述の取り組み方を継続したお陰で、何とかやり遂げてきたと自負している。

次に、大学の研究者としての図書館の利用法について紹介する。私は一時期、会社に勤めながら、東京工業大学で研究するという2重生活をしていた。フレックスタイム制を活用するといっても、家庭もあり、時間的には厳しいものがある。それを乗り越えるために、最初に手をつけ

たことは、効率よい研究を行うために研究戦略を立てることであった。まずは、研究の大局観を掴む必要があると考え、豊富な専門書や内外の学術誌を開架式で閲覧することができる図書館を探し、つまみ食いの形で大量の文献を流し読みした。ここでは、1冊の書籍のうち1行でも有用な情報があれば万金の価値があると割り切り、大量の文献に目を触れるよう心がけた。この結果、どういう文献がどの棚にあるか大まかな“アタリ”が頭の中にでき、研究途中に困った時には直ぐにその棚に行き、解決の糸口を見つけることができるようになった。

これはその後の研究のスピードアップに大いに貢献し、運良く3年間で博士号を取得できた鍵の1つであると考えます。

ところで、先日、紀元前にはローマ以上の繁栄を極めていたカルタゴのあったチュニジアを訪問した。学会の途中に沙漠の周辺地域にある普通の家庭を訪問したが、中学生の部屋のテーブルに、びっしりと手で写された本が置かれていた。この国は民主化の後、急成長しており、

恵まれない環境の中、子供たちは生活を変えるために必死に勉強をしている。それにひきかえ、東京には様々な図書館に加え、大使館などの資料室も充実しており、意欲があれば様々な視点の情報を自由に入手することが可能である。東京以外の地域と比べても格段の差が存在する。また、人類の歴史の中でみても数%もない幸せにあたる。皆さんがこの恵まれた環境をフルに活用され、豊かな人生を送る糧として図書館を利用されることを心から祈る。

(経営学部助教授 経営情報システム論)



本館1階新聞縮刷版コーナー

We live here!

中川 浩宣

NAKAGAWA Hironobu

だれしも次のようなエピソードを耳にしたことがあるのではなかろうか。然る著名な学者は日々、研究に没頭しており、長年にわたり座っていた跡が椅子に深く刻み込まれんばかりに残っているというような伝説的なエピソードを。最近では木製の椅子は主流でないので、話がそのまま当てはまるわけではないが、長時間、一定の場所で作業をするという意味においては似たケースが身近なところで実際あった。以前、私がアメリカの大学院に在籍していた頃一確か、やっとコースワークを終え、dissertationに取り掛かった時分で、試行錯誤を繰り返していた頃だったと記憶している。大学の図書館で深夜、後輩の大学院生3、4人が熱心に勉強している（通常、論文を書く前段階として、大学院1年目と2年目の学期末に資格試験が生き残りをかけて行われるため、言わばノーチョイスなのである）ので、「頑張っているね」というような感じで声をかけると、“We live here.”と半分冗談、半分本気のような言葉が返ってきた。なるほど、「住んでいる」... か。納得すると同時に、ある種peer pressure（今となっては有り難い）を感じたので、この時のことは鮮明に覚えている。注

住むともなれば、その住環境の良し悪しは殊の外、問題となってくる。もちろん、ここでは飽くまで図書館の話であるから、文字通り「住む」とまで行かずとも、そこで相当の時間を過ごすという観点から、人々が図書館を利用する際の環境がポイントになってくるということである。つまり、図書館がどのような「場」、「空間」を利用者

に提供できるかが重要視される。少し具体的な内容について述べよう。「場」、「空間」とは、学生、学者の立場からするとstudy spaceとしての意味合いがある。その空間は時には緊張感を、また、時にはリラックス感をもたらす。ここでいう緊張感とは身近な具体例をあげれば、図書館のお気に入りの所定の場所で諸々の準備を経て作業に入ると嘘のように集中力が引き出され、仕事がかどるというような状況を思い起こしてもらえればよい。（もちろん、周りが静粛に机に向かっているという緊迫感も関わっているだろう。）一方、リラックス感とは、例えば、だれしも経験したことがあるであろう、喧騒な街中から図書館に入って行った時に感じる、ホッとするような、ある種の安心感をもたらす図書館の雰囲気を目指している。これら両者の相反する作用が微妙なバランスをもって我々を迎えてくれるのが理想的な「場」としての図書館だと思うのである。個人的にも現に、邪念を捨て、ある程度持続的な集中力が要求される時は図書館で仕事をする事が多く、自己採点だが、能率はアップするのが通常だ。と同時に過度の緊張感からの開放と、気分をリフレッシュすることも可能だ。敢えて焦点を絞らず、窓からの風景を眺めながら一日の移り変わり、季節感を味わうのは、ある意味、至福の時間だ。

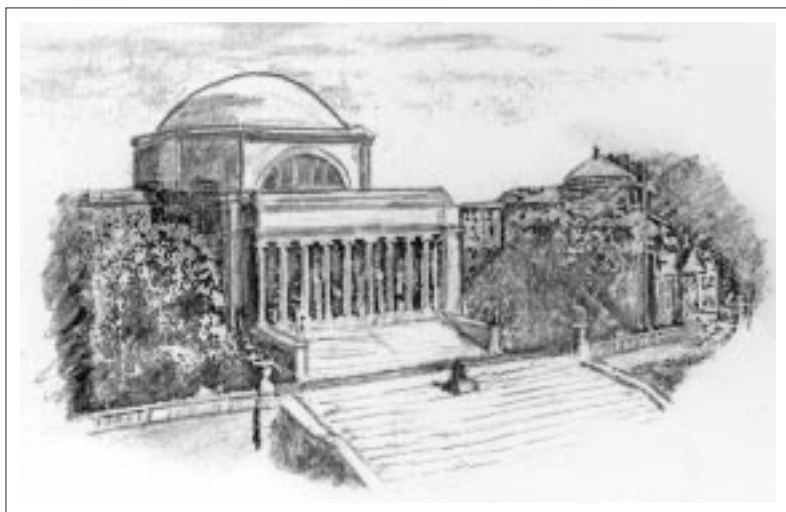
また、図書館は一個人としての利用にとどまらず、グループで利用する「場」としても大きな価値がある。図書館において学生時代に友人とあれやこれやと議論した時のことは不思議と記憶に残っていたりする。この点、相模原キャンパスの

注 このようなことを書くとアメリカのPh.D.プログラムは悲壮感を伴うものに聞こえてしまうかもしれないが、何事もとことんやれば面白くなってくるものである。

万代記念図書館はグループで話が出来る部屋やオープンスペースが備えられており、学生達が生き生きとしている姿を見るにつけ、こうした機会を提供した粋な計らいに感謝したい気持ちになる。このような場所を一層充実させてほしい。

今まで「場」を提供するという観点から、図書館の一般論を述べてきたが、一口に図書館といっても学校の図書館、国公立の図書

館、歴史的資料等の保管機能中心の図書館など形態は様々である。アメリカの大学では多くの場合、専門分野別に図書館があり、それぞれが顔を持っている。私が在籍していたコロンビア大学にも計28の図書館があり、そのうちいくつかを用途やそのときの気分に応じて何度となく利用したものだ。専門分野の関係で Thomas J. Watson Business & Economics Library や C.V. Starr East Asian Library を訪れる頻度は高かった。外観が見るからに重厚な構えの Butler Library は24時間開館なので徹夜向きか。数学、統計で何か調べるものがある際には Mathematics & Science Library が重宝した。数学の本は bookshelf life が比較的長いからか年代ものの蔵書が豊富で、ひんやりとした書庫は独特の匂い(カビ臭い?)が漂っており、それが先人の息遣いを感じさせるようで却っていい刺激になった。あまり人に会いたくない、一人で集中したい時は Law Library や大学付属の Barnard College の図書館に籠るという手もある。前者は若干、閉鎖的な感じがするところだが、後者にはさほど大きくはないが、庭園があり、図書館の前は春から初夏にかけて色鮮やかな花々が競い合って咲く、癒し効果抜群のスポットである。特に試験や論文も含め学生



コロンビア大学 ロー・メモリアル図書館

カット 中川浩宣

にとっては厳しい学期末が丁度、桜の時期と重なるので、毎年懸命に咲く花に救われた気がした。また、キャンパスのほぼ中央に位置する Low Memorial Library はキャンパスのシンボルの存在で、ドーム型の建物内の大理石は見事であり、また、貴重資料の宝庫でもある。以上、ただ羅列的に述べてしまったが、今振り返ると、その時の必要性や心境に応じて、いろいろな図書館を「場」として活用できたことは非常に贅沢で有難いことだったと改めて認識する。

最後に一般論に話を戻すと、量的な程度はともかく、今後もこうした「場」、「空間」を提供するということは、図書館に求められる大きな役割の一つだと言えるであろう。無論、伝統的な図書の保管、貸し出し、レファレンスサービスから電子ジャーナル、CD-ROMによる情報提供といった図書館の電子化の流れ、延いては電子図書館へとそのかたちは変化し続けるであろうが、人の集う「場」としての機能は時代を問わず、欠くことのできないものに相違ない。部屋に籠ってのパソコン利用の学習・研究やインターネット一辺倒ではなく、もっと図書館へ行こう。「住めば都」である。

(国際政治経済学部助教授 国際経済学、国際金融)

視覚の時代の幕開け

—フランス最初の挿絵入新聞『イリュストラシオン』—
L'Illustration 1843-1944

荒木 善太

ARAKI Zenta

フランスで最も古い挿絵入新聞『イリュストラシオン』は、1843年からほぼ一世紀にわたって刊行され、同時代のフランス社会を記事と挿画の両面から浮き彫りにする。報道記事に図版を添えた紙面の体裁は現在の読者にもすでに馴染みのものであり、翻っていえば、今日我々が知る新聞・雑誌の紙面の概念自体が『イリュストラシオン』の100年を通じて一般に浸透したものと考えてよい。同紙が名称としている illustration の語には「挿絵、イラスト」のほか、「例証、説明」の意があるが、『イリュストラシオン』創刊号の巻頭言には、木版画による挿絵掲載の趣旨として、「(読者に対し)物事を現実に見たと思えるほどにははっきりと理解させる」旨の意図が明記されており、挿絵や図版という視覚資料によって事実関係に比類のない例証を提供するという、今日に通ずる神話の原点をこの『イリュストラシオン』に見ることも可能である。

『イリュストラシオン』が発行された19世紀のフランスは、一面において「視覚の時代」とも呼ぶべき相貌を垣間見せることがある。世紀前半、ロマン主義の文学が特にその紀行作品を通じて盛んに流布したのは「絵画的」pittoresqueという言葉だった。「ピトレスク」とは18世紀末のジラルダンの庭園論以降、ロマン主義における新たな自然観の浸透と共に急速に普及した美意識であり、ラマルティーヌやスタンダールを始め、同時代の文学には「絵画的」な叙述、すなわち記述の行為を可能な限り一個の視線に近づけようという一貫した意思と努力が見てとれる。ゴーチエに倣って



カルーゼル広場のガス燈 (1844)

いえば、「見るということ、そのためにはただ目を開きさえすればよいと思われがちだが、実際にはそれは長い修練を経て初めて獲得される技術にほかならない」のであり、19世紀のフランスは、現実の世界をいかに「眺める」という視覚の技術の獲得に腐心していた時代でもあった。挿絵入新聞『イリュストラシオン』の登場は、1839年のダゲールによる写真術の完成と共に、現実の視覚的把握を共通の関心事としていた時代の必然的産物だったのである。(『イリュストラシオン』と共に開幕した「視覚の時代」は、1850年代に入るとナダールらによる肖像写真の流行と共に急速に大衆化し、世紀末にはリュミエール兄弟による映画



凱旋門の上に現れた彗星（1864）

の発明によってさらにその傾向を加速させることになる。『イリュストラシオン』の100年は、その意味では確かに視覚媒体の大衆化の過程と符合するものだった）。

副題に Journal universel の呼称を掲げ、「普遍的」記述を標榜する『イリュストラシオン』は、その名の通り一世紀におよぶフランス社会のあらゆる話題を網羅し、時代を映し出す鏡としてのその資料的価値については言を待たないが、一方でこの「普遍的」universal という語もまた、すぐれて19世紀的な理念の一つであったことは注目しておいてよいだろう。同じ語は、19世紀後半から20世紀前半にかけて繰り返し開催され、時代の中心的なイベントとなった「万国博覧会」exposition universelle にも現れる。「パリ万国博覧会」の目もあやなスペクタクルを、『イリュストラシオン』は時に鮮やかな彩色挿絵を交えて活写しているが、見方を変えれば『イリュストラシオン』自体、紙面という二次元の媒体に移された今一つの「万国博覧会」と

もいうべきものではなかっただろうか。

図書館本館には総計5000号以上におよぶ『イリュストラシオン』の全巻が所蔵されており、挿絵や写真など、その膨大な図版資料が繰り広げる「19世紀という名の博覧会」の光景は壮観といっ



本館新書庫集密書庫

てよい（手軽に手にとってその印象に触れるには、フランス文学科合同研究室の開架辞書室に置かれている全17巻の索引付ダイジェスト版が便利である）。実際に紙面を繰ってみると、多くはまず最初に挿絵に目を奪われ、その後で記事に目がいくという順序であって滅多にその逆は起こらない。発行者が意図したように、挿絵はここでは本文に添えられた二次の情報というより、本文と同等ないし場合によってはそれ以上の地位を占めているのだが、この事情は文字情報と視覚資料を併用した現在の多くの媒体の場合も同じだろう。19世紀の『イリュストラシオン』以来、我々はもう150年以上、新聞・雑誌の紙面を前にして同じ動作を繰り返しているのである。

（文学部助教授 フランス文学）

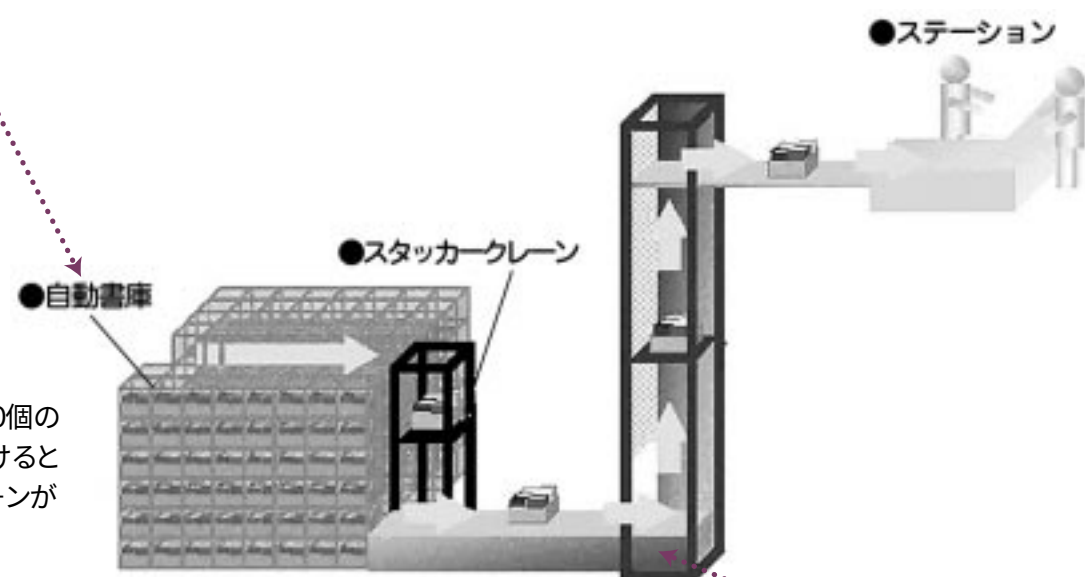
自動書庫の出庫まで

相模原キャンパス開学と同時に、万代記念図書館に自動書庫が設置されました。今回は、普段皆様に安全上の理由からご覧いただけない、地下の自動書庫からカウンターまで図書が搬送される過程をご案内いたします。



① 自動書庫内

コンピュータに所在管理された図書が12,000個のコンテナの中に入っています。出庫指示を受けると指示図書の入ったコンテナをスタッカークレーンが探しにいきます。



② コンテナのコンベヤ輸送

指示図書の入ったコンテナを見つけると、スタッカークレーンがコンテナを引き出し、昇降機まで続く台車に載せます。コンテナを載せた台車は、各出納ステーションまで続く、昇降機(エレベーター)まで自走します。

③ 台車から昇降機へ移送

運ばれてきたコンテナは、出納指定階の出納ステーションに向かうために、ここで昇降機(エレベーター)に乗り換えられます。



④ 出納ステーションに到着

OPACにて指定された出納階のカウンターに指示図書の入ったコンテナが到着しました。このコンテナの中から、図書館スタッフが指定された図書を選別して出庫口棚に配架します。



(万代記念図書館 図書グループ 飯田 茂之)

明治大学図書館

眞鍋 絵李葉

MANABE Eriha



明治大学創立120周年記念事業の一環として建設された明治大学駿河台キャンパスの中央図書館は、蔵書数100万冊以上、面積は100周年記念図書館と合わせ12,485平方メートルという非常に大規模な図書館です。御茶ノ水駅、新御茶ノ水駅、神保町駅からそれぞれ徒歩5分とアクセスも良く、明治大学のシンボルであるリバティータワーに併設された、都会的なセンスに満ちた建物です。1階から地下3階までを結ぶスケルトンのエレベーターと開放感のあるガラス張りの吹き抜けに、初めて訪れた時はこれが大学の図書館なのだろうかと思わずに圧倒させられました。

もちろん、明治大学図書館は外観だけではなく、情報処理技術や学術研究の発展、また多様化する学生のニーズなど、取り巻く環境が急速に変化している今、大学図書館は新たな対応を求められています。そのような時代の流れに適合するように、明治大学は「自立型図書館」を目指し、学生が自分に合った方法で必要な情報を入手できるよう環境整備を行っています。その一例が、エントランスを入りすぐ左手にあるマルチメディアエリアです。このエリアには多数のPCが並び、インターネットを利用して世界中の情報にアクセスすることができます。また、明治大学は特別コレ

クションとして、日本近代文学の貴重な資料や、日本地誌学の先駆者で『大日本地誌大系』全40巻の編纂者である蘆田伊人氏の古地図コレクションなどを有しており、インターネットのホームページからでもそのいくつかを閲覧することができます。

さらに、中央図書館にはいくつかのユニークな工夫があります。様々な用途に合わせて作られた閲覧室もその1つです。一般の閲覧席だけではなく、自動販売機が設けられ飲食が可能なラウンジや、数人で議論をしながら勉強することのできるグループ閲覧室、静かな環境を提供するロダンルームと呼ばれる部屋などが用意されています。また、自動貸出機が数台設置されていて、カウンターで並ばずとも本を借りることができるのも嬉しいサービスです。

私は、ゼミ活動の関係で明治大学に行くことが多く、また自宅からも近いことから、何度も明治大学中央図書館を利用しています。この図書館の魅力はなんといってもその蔵書数の多さにあります。目当ての本を探すのに多少手間取ることもありますが、係の方が図書館の使い方などを丁寧に説明してくださるので安心です。また、様々な設備が整い、多様な閲覧席で目的に応じた勉強空間を提供することは、大学図書館の新しいあり方として注目すべきであると思います。

山手線コンソーシアムでは中央図書館だけではなく、和泉図書館、生田図書館も利用できますが、私のお勧めはやはり中央図書館です。充実した設備を利用できるだけでなく、青山学院とはまた一味違う都会型大学を体験できると思います。

(国際政治経済学部国際政治学科4年)

データベース、電子ジャーナルのご紹介



青山学院大学図書館では、オンライン、CD-ROM合わせて多数のデータベースを導入しています。誰もがインターネットで検索をする時代になりました。真の情報検索のテクニックを磨くことは良い研究につながり、また就職された際にも社会の活性化につながります。今回は新しく公開されたデータベースと、代表的な電子ジャーナルをご紹介します。是非、大学図書館HPのオンラインデータベース検索から利用してみてください。

<http://www.agulin.aoyama.ac.jp/database/database.htm>

新しく公開されたデータベース

- **NACSIS-IR**
広範囲の分野の文献情報、学術情報などをオンラインで提供する国立情報学研究所による情報検索サービス
- **eol DB Tower Service (有価証券報告書検索サービス)**
上場企業約3600社の10年に及ぶ膨大な財務データを収録し、総合的かつ詳細なデータを提供
- **Mergent Online (FISonlineから名称変更)**
世界の企業情報、財務データの入手が可能
- **リーガルベース**
株式会社日本法律情報センターがインターネット上で提供する法的総合データベース
- **Linguistics and Language Behavior Abstracts**
言語学関係の文献情報を提供
- **FRANTEXT**
大仏語辞典 Trésor de la langue française 作成用データに基づく国立フランス語研究所によるデータベース
- **OED online**
2010年刊行予定のOxford English Dictionary 第3版に含まれることになる語が逐次検索可能

電子ジャーナル

- **ProQuest**
雑誌約2300誌の記事や新聞(New York Times、Herald Tribune、The Times of London)の記事も48時間以内にすばやく入手できる。
- **EBSCOhost**
Academic Search EliteとBusiness Source Eliteの2つのファイルがあり、数多くの雑誌論文、記事が入手できる。
- **ScienceDirect**
エルゼビア社提供の全文データベース。本学が購読しているエルゼビア社の雑誌が閲覧できる。

今回ご紹介した他にも数多く有用なデータベースがありますので、学内の皆さんの利用が盛んになることを心より願っています。

(本館参考係)

冬期休業期間中の開館のお知らせ

12月24日は下記の時間開館します。

■ 青 山キャンパス：9時～19時

■ 相模原キャンパス：9時～17時

12月25日～1月7日までは冬期休業期間のため閉館、1月8日から通常開館します。

プリントステーション 設置

青山キャンパス図書館1階の情報検索コーナーに、プリントステーションが設置されました。

プリペイドカード（イーゴカード）または金額をチャージした学生証で、インターネットの情報を印刷できます。ただし、館内のみ利用可能です。

なおOPAC、CD-ROM用のパソコンからの印刷は従来どおり用紙を持参してください。



情報コンセントの新設

青山キャンパス図書館3階のグループ閲覧室Aに、ノートパソコン用コンセントを16口設置しました。

グループ学習でノートパソコンを使用する場合は、この部屋を利用してください。

マルチメディア室と同様に情報科学研究センターに接続可能です。

リサイクルブックコーナー

青山キャンパス図書館1階の新聞閲覧室に、リサイクルブックコーナーを常設しています。

これは図書館で不要になった本および雑誌を利用者に無料で提供しているものです。

1人5冊まで備え付けのノートに記入のうえ、自由にお持ちください。



【お詫びと訂正】

AGULI62号(2003.7.1刊)3ページ右欄上から9行目記載の「ディオニュソスの耳」は「ディオニュシオスの耳」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報 AGULI 第63号 2003年11月1日発行 表紙・絵／岸 英朗(大学名誉教授)

編集 青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当 TEL.03-3499-1402 FAX.03-3407-4472

発行 青山学院大学図書館 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 <http://www.agulin.aoyama.ac.jp/>